

指示詞におけるコソアド体系の整備

迫野, 虔徳
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/8940>

出版情報 : 語文研究. 94, pp.1-12, 2002-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



指示詞におけるコソアド体系の整備

迫野虔徳

1

指さしことば（指示詞）は、ことばの中でもかなり特異な性格を持っている。コレ、ソレ、コノ、ソノなどは、指さし

という動作をともなつて用いられるのが原則である。真つ暗闇の中で「君は、海と山とどっちが好きだ」と聞かれて、返答に格段に困るということはないであろう。しかし、何も見えないところで突然「君は、コレとコレとどっちが好きだ」と聞かれたら、普通の状態では会話は成り立たないはずである。顔を振り向けてもいいし、あごをしゃくくってみせてもいいが、これらの語は、何らかの指示的な動作をともなつてはじめて聞き手に了解されるという特別な語群である（すくなくとも現場指示において）。

これまで、この指示詞については、コ系、ソ系、ア系のそれぞれについて、その指示領域をどのようなものとして捉えればいいかということを中心にして多くの議論が積み重ねられてきた。

その歴史的な展開についても、すでに詳細な考察がいくつかなされているが、その議論の中心は、コ、ソ、ア系の指示語の一つ一つの指示する内容、その相互の關係などを分析して、指示詞の時代的推移を明らかにしようとするものが多い。橋本四郎「指示語の史的展開」（『橋本四郎論文集 国語学編』1980 角川書店）山口堯二「指示体系の推移」（『国語語彙史の研究』1980 和泉書院）それに最近出されたばかりの李長波『日本語指示体系の歴史』（2002 京都大学学術出版会）など、いずれもこの線に沿った労作である。

しかし、日本語の指示詞の歴史的な展開ということについては、もう少し別の視点から考えるべき問題があるのではないかと思われる。現代日本語の指示詞を特徴付けるのは、何と言ってもその整然たる体系性である。

不定称ド系	称		場所	方向	位置	指定	状態	容子
	定	不定						
コ系	コレ	ココ	コッチ	コチラ	コノ	コンナ	コー	
ソ系	ソレ	ソコ	ソッチ	ソチラ	ソノ	ソナ	ソー	
ア系	アレ	アスコ	アッチ	アチラ	アノ	アンナ	アー	
ドレ	ドコ	ドッチ	ドチラ	ドノ	ドンナ	ドー		

いわゆるコソアドの体系であるが、このような整然としたパラダイムが構成されたのは、いつごろのことか、その背景にはどのようなことが考えられるかということは、指示詞の展開において考えておくべき大切な問題ではないかと思われる。

このかたちを見てまず注意を引くのは、不定称のパラダイムへの組み込みである。以前から「イツレ」「イツコ」「イツチ」など「イツ」のかたちで定称指示語と基本的な対応を持つものもあったが、「コノ」「ソノ」「ア(カ)ノ」「コナタ」「ソナタ」「ア(カ)ナタ」に対応して使用される不定称の「イツレ」や「イツカタ」のように、定称のかたちとずれているものもあった。「ココ」「ソコ」「アス(カシ)」「コ」の定称の「コ」の形に対して、「イツク」のかたちも広

く行われたように、不定称は、それ独自に語彙的と言ってもよさそうところがあった。

これに対して新しいパラダイムは、不定称に「ド」のかたちを義務化している。「ドノ」「ドチラ」「ドンナ」「ドー」などその先行するかたちをにわかに想定できないものの中にはあるが、いづれにしてもそのかたちは、すべて「ド」「ド」ではじまり、定称に並行的なかたちに整えられている。「このこと」は、不定称がこのパラダイムに不可欠な部分として組み込まれていることを示している。

不定称の「ド」のかたちは、平安末期に起きた濁音前の狭母音脱落がまずあり、そこに定称の中でも使用度の高い「コ」系（近称）「ソ」系（中称）のオ段音の牽引が働いて出来たものである。

この新しく成立したパラダイムで、もう一つ注目されるのは、「コンナ」「ソナナ」などの指示形容詞、「コー」「ソー」などの指示副詞の類が加わったことである。

「コレ」「ソレ」「アレ」「ココ」「ソコ」「アソコ」「コチ」「ソチ」「アチ」などの古くからある指示語は、すべて名詞性の指示語である。

本を指さして「コレ」ということも、「コノ本」ということもできる。「コノ本」は、「コレ」の含み持つ指示性と指さ

されたモノを分析的に表現したものである。「コノ」「ソノ」は指示専用の語であるが、おそらくこの「コ」や「ソ」ですべてを指示していたのを、さし示す対象によって細かく区別するようになった。うしろに「レ」「コレ」や「コ」「ココ」「チ」(コチ)などを付接して、モノ・ヒト・コト、あるいは場所、方向など、指さす対象を(大粹化して)明確にしようにとしたものと思われる。指さされる対象の分化が進んだだけで、基本的にはすべて名詞的な性質のものということになる(「コノ、ソノ」の指示専用語も名詞性指示語の分析的表現の一部として常につかわれるという意味で、この名詞類に含んでよいであろう)。

「コレ」「ソレ」「アレ」などの名詞性指示語は、助詞を伴って文の中で曲用はされるが、当然、名詞としての枠を出ることはできない。ここに指示形容詞「コンナ」「ソソナ」「アンナ」「ドンナ」、指示副詞「コー」「ソー」「アー」「ドー」が加わることで、指示詞は、文を構成するすべての側面にコンアドの統一形式で参画できるようになった。

まずコンナかたちに延ばして、それからコー切って、次にコレでコースルとコーナリマス

「コースルとコーナル」などの表現が可能になったということは、「叩くとつづれる」のように動詞で表す内容をも動

作指示で表すことができるということである。

もちろん、コソアドのかたちに統一される以前にも、「カク」や「サ」「シカ」、「カヤウ」、「サヤウ」、「カバカリ」、「サバカリ」など種々の語で表現されていたのであるが、それがコソアドの一系列に組み込まれて統一的に表わされるようになったということは、指示表現のありかたとしては、やはり大きな変化であるといわなければならない。

指示副詞の史的展開については、岡崎友子氏による示唆的な論考が最近公にされている。^{注1)} 岡崎氏によると、古代語の「カク」には、今現場で知覚・感覚できることを直接指示する直示用法と先行の発言内容を指示する照応用法とがあったが、「サ」には直示用法はなく、照応用法中心というように違いがあった。また、構文上の機能面から見ても、「カク」には修飾機能があったが、「サ」には見られない(補充が中心的機能)など、古代語の「カク」「サ」には種々違いがあったことを指摘しておられる。現代語の指示副詞「コー」「ソー」などと比較して「サ」の隔たりが大きいが、「カク」にしても遠近の距離的区別がないなど、その用法上の違いにはかなりのものがあつたようである。

このような古代語の指示副詞が現代語のコソアドの系列に組み込まれるというのは、やはり一つの大きなできごとであ

る。

縦と横の両方向からなされたこの指示体系の整備は、日本語の底流で進みつつあった大きなうねり（談話構造の変化など）の反映とみることもあるいは可能であるかもしれない。^{注2)} その点については、なお、あらためて慎重な考察を加える必要があるが、いまは、このような問題を含むものとして、このような指示詞体系の整備が果たされた時期や経過などについて以下に見ておくことにしよう。

2

『方言文法全国地図』(第1集第8図)に「そんなことを(言うな)」の「そんな」の言い方を調べた分布図がある。

それによると、日本本土方言は(1)ソナナ(2)ソナナ(3)ソガイナ(4)ソナイナの四地域に大きく分かれるようである。

(1)ソナナは、ホンナなどの異形も含んで、四国・近畿以東の広い地域に行われている。これは、文章にも書かれる現代日本の標準的な語形である。(2)のソナナは、多くの異形があるが、東北地方に広く行われている。(3)のソガイナにも、「ソガエナ」「ソガナ」「ソガン」「ソギャン」

「ソゲナ」などの多くの異形がある。『方言文法全国地図』では、九州全域・中国大部分、四国西部に広いまつまつた分布域、ついで、新潟・佐渡・山形の北陸・東北にある程度まつまつた分布がある。秋田・宮城・栃木にも一箇所づつの報告がある。その他、南近畿・愛知にまつまつた数地点の報告があり、山梨・御蔵島・八丈島などにもある。(4)の「ソナイナ」「ソネーナ」は、山口、岡山、兵庫、愛媛東部、香川などの中国・四国地方を中心に、その他愛知、山梨、長野などに散在して分布している。^{注3)}

上の分布を見ると、(2)の「ソナナ」は、東北地方に偏って分布するが、(3)の「ソガイ」は、東北・関東・北陸、中国・四国・九州の東西に分布し、(1)の「ソナナ」を包み込む周囲的分布をしているように見える。(4)の「ソナイナ」は、「ソガイナ」の内側にやはり周囲的な分布を見せている。

この分布からすると、近畿中央部でまず「ソガイ」が発生し、次いで「ソナイ」、もっとも遅れて「ソナナ」が生まれた。「ソナナ」は、地方での新たな成立の可能性があるとということになる。

文献を見ると、『物類称呼』(安永四・1775)には、

あのやうに このやうにといふを 勢州長島及出雲辺

又は播磨などにて あがい、こがいと云。九州にて あんがい、こんがいと云。総州にて あげへに、こげへにといふ。又あんな、こんなといふは、あのやうな、このやうな也。

と、方言としての「ア(ン)ガイ」「コ(ン)ガイ」「アゲー」「コゲー」の指摘、そして「アンナ」「コンナ」の語源についてふれた記述がある。

近松門左衛門『博多小女郎波枕』(享保3・1718初演)に今で思へばむぞうらしげに、そがいにせいで大まじなかつた。上方衆は気がよかけん、こがいなことは有るまいと、仕方まじりの高咄。

と。物類称呼¹⁾が方言と指摘する「ソガイニ」「コガイナ」などの指示語が見える。これは、海賊船(密貿易船)の首領毛剃九右衛門のせりふの中にみられることばで、この男は長崎者という設定である。「ソガイニせいで」は、そんなにしないで、²⁾「コガイナコト」は、こんなことの意で、³⁾ここでも、こつういことば使いで長崎者らしさを表現しようとしたものと思われる。

近松よりずっと以前、ロドリゲス『日本大文典』(1604)でも「コ(ン)ガイ」「ソ(ン)ガイ」の類は、すでに九州方言であったとされている。日本各地の方言を記述した章

(「ある国々に特有な言ひ方や発音の訛に就いて」)の九州方言全般について解説した記事の中に、九州には「多数の粗野な語がある」として、

例へば、Angai (あんがい)′ Congai (こんがい)′
Angaina (あんがいな)′ Congaina (こんがいな)′
Angaini (あんがいに)′ Congaini (こんがいに)′ など

と例示する。「アンガイ」「コンガイ」の類が九州方言の「粗野な語」の典型例として扱われているのである。ロドリゲスの時代、その発信地と思われる京都などの近畿中央部にはすでにこのかたちはなく、その周辺の東西に拡散分布するといふ、現代の分布によく似た状態がすでに出来上がっていたといふことも考えられる。

この「ソガイナ」に挟まれた内側には「ソナイナ」、そのさらに内側に広く「ソナナ」が分布しているが、「ソナナ」のかたちは、キリシタン文献にもまだ現れていない。「ソナナ」は、文献の上では西鶴の作品(好色五人女・1688)あたりに見えるのが古いようである。方言の分布からみても、文献へのあらわれかたからみても今日一般的に用いられる「ソナナ」のかたちの成立はかなり遅れるようである。

指示形容詞「コンナ」「ソソナ」の成立は、指示副詞「コー」「ソー」と密接に関連しているように思われる。指示副詞と指示形容詞は「コナイする」「コナイなもの」「ソガン言つ」「ソガナこと」「コゲする」「コゲなもの」のように、普通、形容動詞の連用形と連体形に相当するものであることからみて、「コンナ」「ソソナ」は「コー」「ソー」の副詞のかたちと密接な関係をもって成立したものであると思われる。おそらく副詞「コー」「ソー」に単純に「ナ」を付して形容詞にしたもので、長音の部分が後接する「ナ」の影響で撥音のかたちになったのである^(注)。

「コンナ」「ソソナ」に先行したと思われる「コガイ」「ソガイ」「コナイ」「ソナイ」は、それぞれ「コレガヤウ」「コノヤウ」の転と考えられる。指示副詞「コガイ(ニ)」「ソガイ(ニ)」「コナイ(ニ)」「ソナイ(ニ)」、指示形容詞「コガイナ」「ソガイナ」「コナイナ」「ソナイナ」はそれぞれ形容動詞の連用形と連体形のかたちにあたり、その成立は自然である。

それに比して、形容詞「コンナ」「ソソナ」が副詞「コー」「ソー」に由来するものとすると、その成立はかなりいびつ

なものである。自然な成り立ちを持つ「コガイナ」「ソガイナ」「コナイナ」「ソナイナ」が定着せず、かえって「コンナ」「ソソナ」が広く受け入れられるようになったのは、関連を持つその副詞形「コー」「ソー」の一般化がおそらく大きな力になったものと思われる。「コー」は、古典語の「カク」「ソー」は「サ」から発展したというのは疑問の余地はなさそうである。それぞれ「コー」「ソー」のかたちで名詞性指示語の三系列「コ・ソ・ア」の体制へあらたに組み替えられ、頻用されるようになった。古い伝統的かたちにつらなるということがこの指示形容詞「コンナ」「ソソナ」の成立、定着を大きく支えているものと思われる。

先述のように、指示形容詞、指示副詞が加わることによって、指示表現を文に組み込むために必要なすべての側面が整えられたということになるが(スル、ナルなどと複合して動作指示も可能)、こうしてみると、このような体制の整備に指示副詞「コー」「ソー」の果たした役割は、非常に大きいものがあつたと言つことができる。

新しい指示の体制は、不定称も含めたコソアドのかたちで体系化されていることは先に触れたとおりであるが、指示副詞はのちにあらたに参画したということもあつて、その点の整備がやや遅れたのではないかと思われる。

指示副詞の「アー」「ドー」の遅れについては、これまでもしばしば指摘されてきた。「このうち」「アー」の文献での確認が遅くなることについては、個別の問題としてよいであろう。しかし、いま一つの「ドー」は、コソアの定称全体に対する不定称の問題ということになり、新しいパラダイムの完成という点からは、やや問題であると言ってよいであろう。「ドー」の不成立というのは、指示形容詞「ドンナ」の未完成をも予想させ、指示副詞、形容詞の未成熟が疑われてくるのである。

指示副詞の不定称「ドー」の成立がかなり遅れたらしいことは、たとえば『日葡辞書』(1603)に見られる次のような記述のゆれからもある程度つかがわれる。

Dō 例' Dónaritomō xeyō (だうなりともせよ) どの
やうにでもするがいい Dōmō narozu (だうもならう
ず) すなわち、Tōmō narōzu (たうもならうず) どの
やうにでもなるべからう。

「ダウ」の見出しの解説中に「ダウモ」と一緒に「タウモ」のかたちも示されている。

『ロドリゲス日本大文典』(1604)にも「Dōmō cōmo (だう
まかじも)」、「Tōmō cōmo (ともかじも)」、「Tonimo cacunimo
(兎にも角にも)」(土井訳487p)のちうに「ダウモカウモ」

と「トモカウモ」をそのまま並べてあげているようなところがある。

「コー」「ソー」系列の不定称「ドー」については、「コレ」「ソレ」系列の「ドレ」(イツレ)、「ココ」「ソコ」系列の「ドコ」(イツコ)のように先行する不定称のかたちをすぐに想定することができない。「コノ」「ソノ」系列の「ドノ」のように体系の欠落を埋めるかたちでの成立ということも一応は考えられるが、「コー」「ソー」の系列化自体がまだそれほど安定的とは言えない状態であったとすれば、それにそれほど安易に従ってよいかどうか、疑問がないとは言えない。『日葡辞書』や『大文典』に「ダウ」と「タウ」が並記されているということは、「ドー」の成立間近でまだ安定的でなかったことを思わせると同時に、「タウ」の清音形とゆれを生ずるような成立の契機がそこにあったことを示しているようにも思われる。

『捷解新語原刊本』(1676刊)。成立はこれより40年ほど前に、

とうもこつもおしらるままにしてむし(無事)にすみま
るしたほにめてたう御さる

と、ハングル表記では「ドウモ」と読める例があるが、「こ」の部分、『改修本』(1748刊)では、「ともかくもおつしやる

たうりにして、ふしにすみましてよう御さりまする」と「トモカクモ」になつてゐる。

先の『ロドリゲス日本大文典』もそうであつたが、「タウ」と「カウ」が一緒に使われることが多く、「トカク」「トモカクモ」と言い換えられるものがあることからすると、「ドー」はこの「トカク」「トモカクモ」の「ト」から発展成立したのではないかと疑われてくる。「カク」が「カウ」と音便のかたちをとつたのに合わせて「ト」も「トウ」となり、「トウカウ」から「ドー」ができたのではないかということである。しかし、「トカク（兎角）」「トモカクモ」のような慣用句から「ドー」のような頻用性の高い一般語が生まれるかどうかといふことに疑問を抱く人もいるであらう。「トカク（兎角）」「トモカクモ」のかたちにはほとんど固定化した傾向のある今日の目からみると当然の疑問であるが、古くは指示語「ト」と「カク」は対のかたちで今日よりはるかに自由に用いられていたようである。

ト歎カウ歎ナト不審スルト如何　云々トカキテトニカク
ニトヨメリ　左右トカキテトサマカウサマトヨメル

(名語記)

兎ヤセマシ角ヤ可有ト長詮議シテ

(太平記)

此間三条殿ノ御企、上杉、畠山ノ人々ノ隠謀、兎コソ候

ツレ角コソ候ツレ (同)

トセウカウセウ (史記抄)

トシタカウシタカト (周易抄)

トセイカウセイト云ハズ (周易抄)

命ヲ告テ、トセヨカウセヨト云ハマイソ (周易抄)

サテ化縁デ、トアラウカウアラウトテ (湯山聯句抄)

ふるざとにとゆきかくゆく (為忠百首)

「ト」と指示し、「カク」と指示する、指示の原義をまだ強く持っていたように思われる。次の『ロドリゲス日本大文典』

の記述の

Cono fitoua tōxexi' cōxexino tonorica (この人はたう

せい、かつせいの通りか)

Tosai, cōsai fodonica? (たうさい、かつさい程にか)

(土井訳6p)

の「タウ」の開長音は、その「ト」の長音化したもののものであるが、これなどは、今日の感覚からすると、そのまま「ダウセイ、カウセイ」と言つてもよさそうに思われる。「トカク」の「ト」と「ドー」の近さが思われるのであるが、「トカク」が「トウカウ」となるまではよいとしても、その「トウ」がなぜ濁音化するのかというのがまた一つ問題である。

「ド」モカシ「モ」 「ドレモコレモ」 「ダレモカレモ」 「ドイ
ッモコイツモ」 「ナニモカモ」 「ナニヤラカヤラ」 のように、
不特定の複数を漠然とさす言い方に「不定語カ」 という
類型がある。^(註6)

『ロドリゲス日本大文典』に「重ね詞」(490p)として、

NaniyaCaya (何やかや) Nantoyara cantoyara (何
とやらかんとやら) NaniyaraCayara (何やらかやら)
Nantoyaran catoyaran (何とやらんかとやらん)
Nantomo cantomo (何ともかんとも) Nantidemo
cademo (何でもかでも) Nanimo camo (何もかも)
Nanimo cano (何のかの)

のような例を多く上げているが、「何カ」のかたちは古
くから頻用され続けてきた。

柳田征司氏が示された抄物の例にも、次のようなものがある。^(註7)

ナニヲモカヲモ (四河入海一之三)
何トセウカトセウ (同五之二)
何トアラウカトアラウ

(米沢図書館蔵古文真寶抄八之二)

ナニ集力集 (幼学詩句)

ナンノ説カノ説 (同)

「何」と「カ」を組み合わせたこのかたちは、現代でも

「ナンダカンダ」 「ナントカカントカ」 のようによく使われる。
そこに、「ド」や「ドレ」や「ドイッ」などの新しい不定
語が成立すると、「何」にならった新しい類似表現がそれぞ
れについて作り出されていった。「ド」モカシ「モ」 「ドイッ
モコイツモ」などはみなその類と思われる。

『名語記』に「ドチモカチモトイヘル詞ノカチ如何 カチ
八カノアタリ也」(巻四13オ)という記事があるが、この
「カチ」は、「アチ」の併用形として普通にあつたことばかど
うか疑えば疑えよう。「カノ」「カレ」「カシ」「カナタ」な
どの力系は、次第にア系に取って代わられるようになるが、
不定の複数を漠然と言い表す「不定語カ(コ)」は、後
世に至ってもずっと力系である。「ドチモカチモ」の「カチ」
は、それに合わせて新たに作り出されたものであるかもしれ
ないのである。

「トウカウ」は、この「不定語カ(コ)」の頻用
される慣用表現とそのかたちがよく似ている上に意味的にも
不定語に近いところがあることから、「トモスレバ」という
ことばからも伺われるように「ト」の指示するものは、「一
種の定指示でありながら、話し手の姿勢が定まらないところ
に成立する」(小学館日本国語大辞典)、指示性不定語に共通
の「ド」のかたちへ類推していったのではないかと思われる。

「ドウヤラカウヤラ」は、「トヤランカウヤラン」であつたはずで、「ドー」と濁るのは上の理由からであらう。西日本の方言に、うつ手がなく、手のほどこしようがないという意味で「ドンコンナラン」というのがあるが、これも「トモカクモナラヌ」から変化したものと思われる。近世の文学作品に見られる「どういへばかういふ」「どうめいつた斯うめいつた」の類もこれと同じように考えてよいであらう。

「トセウカウセウ」「トアルカウアル」も「ドウセウ、カウセウ」「ドウアル、カウアル」となり、さらに『日葡辞書』の例文のように、「カウ」との併用も省略するようにになると、そのまま動詞にかかつていく不定語という理解が成立することになる。「こうして発生した「ドウ」は、不定詞としての「ド」のかたちを持ち、「カウ」「サウ」「サ」から転じた」と用法、かたちに共通するものがあるため、名詞性指示語が作り上げたコソアドの枠の中に容易に滑り込むことができたのであらう。「トカク」の「ト」からできた「ドウ」と「カウ」「サウ」との開合の違いが問題になるが、コソアドの枠を拒否するほどの発音上の障害でありえたかどうか。むしろ、枠組みに合わせたの修正の方がこういう場合起こりやすいのではなからうか⁽¹⁾。

「ドー」「ドー」の発生について、柳田征司氏にすでに論があり、

「トカク」の転じた「タウカウ」からの成立を一度は検討しておられるが、結果的には、この可能性を否定された⁽²⁾。惟高妙安（1480?1567）の『詩学大成抄』『玉塵』に

毛詩二進退維谷 コレキワマルトアリ。カウモカウモセ
ラレヌ心ソ
（詩学大成抄）

サキモツマリアトエ八身ガマワサレヌホドニソ。カウモ
カウモナラヌコトソ
（玉塵）

と、今なら「ドウモコウモ」と言いそうなところを「カウモカウモ」としている、というところに否定の理由があるようである。「トモカクモ」から「タウ」「タウ」ができたのであれば、まずこういう例から真つ先に「ドウモコウモ」となりそうなものであるというのがその理由である。「西八カウカウ東八カウカウト云也」（杜詩抄⁽³⁾）「郎等走り帰つて、かうかうと言えは」（本草本平家物語巻第四）のように同一のものを繰り返す言い方があり（万葉などに、アチコチをコチコチ。町の小路のそこそこになんともり給ひぬとてきたり）蜻蛉上、これもその一つと見る余地はないであらうか。

「ドウ」の成立時期について、柳田氏は、『四河入海』の次の例をもつとも早い例としておられる。

一云勿 言八カマイテ旧歳ノ行カ名コリ惜トハナ云ソ。
ナセニナレハ今来新歳モ又辞去ル程ニソ。所詮サアル時

ハトウシテモ去ル程ニソ。去々　ト云ハサラハトウイ
ナシマヘソ　(同六之三六才五)

これは、桃源瑞仙(1436~1489)講、一韓智翔(生没年未詳)(聞書の部分に見られるとのこと)、笑雲清三編集の頃(大永七1527~天文三1534)の語である可能性もあるという。
この例も、「トウ(ト)シテモ、カウ(カク)シテモ去ル」と取る余地がありそうであるし、次いで示された天正十二(1584)年四月の『北野天満宮目代日記』に見える例も

越後ニ参らせよと御申候間、それ八ともかくもにて候、
さらばたつ成共頼存候由申候へ八、誰成共男衆して上よ
と候所ニ……菟角奉頼由申。

「たう(と)なりとも、かう(かく)なりとも、とにかく頼み奉る」と解することができるように思われる。このようにこのころの「ドー」の例かと思われるものは、「トウ」カウ「の「トウ」の例との区別がつけにくい。不定語としての「ドー」は、近世ごく初期においてもまだ十分成熟するまでには至っていないかと思われる。まして、「ドンナ」の形などはさらにその定着は遅れたのではないかと思われる。今日見るコンソアドの体系の確立は、思いの外遅かったということがきよつ。

もちろん、これは、今日見る指示語の語史的な観点からの

「定着」である。「コガイ」「コナイ」など「俗語」の地位にとどまり、文章に書かれる語としてまでの成長をみなかったものが「コンナ」「ソソナ」に先行してすであつた。コンソアドの体系化は、これらまで含めて考えるとき、長い時間をかけてゆっくりとそのかたちを整えていったということになるであろう。

注

- 注1 岡崎友子「指示副詞の歴史的变化について　サ系列・ソ系を中心」『国語学』53巻3号(2002)
- 注2 聞き手との関係や、聞き手の知識についての心配りなど、言語場への配慮の必要性が増大、そのことが重視されるようになったというような変化がコンソアドの整備の背景にあるのではないか。聞き手への配慮の比重が増大する敬語のありかたなどもあわせて考えてみる必要があるであろう。
- 注3 「コナイナ」「ソソナイナ」の類は、小学館『日本方言大辞典』(1986)によると、このほかに富山県・福井県・岐阜県・三重県・滋賀県・京都府・大阪府・奈良県・和歌山県など、近畿地方およびその周辺地域に広くあるようである。
- 注4 東北地方を中心に行われる「ソソタナ」は、「ソソウシタ」からの変化で、ここでもそれに直接「ナ」をつけたものである。「ギヤ」「コゲ」をはじめとする諸形は、そのかたちから見て「コガイ」に遡るものと思われるが、このかたちは「コ

「ソ、ア」ガヤウ（様）あるいは「コレ（ソレ、アレ）ガヤウ（様）」から、転じたものかと思われる。「ガヤウ」の後行母音の脱落（重音脱落）によって、「ガイ」になったものである（ミタヤウダがミタイダになる変化に類似）。「コガイ」は「コガヤウ」、「コンガイ」は「コレガヤウ」の転とも考えられるが、「ソ」の単なる挿入、あるいは脱落と考える余地もある。（「ソ」だけの量、の意を九州方言で「コガシコ」、「ソガシコ」、「アガシコ」、「トガシコ」などというのと語の構成に似たものがある。）

注6 小杉商「『ソ』もかしこも」とその類語『日本語研究諸領域の視点』（1996）

注7 柳田征司「『ソウ』（如何）の成立」『室町時代語資料による基本語詞の研究』（武蔵野書院 1991）

注8 「ト〜カウ」の「ト」の長音形が「タウ」と開音表記になるのは、キリシタンの国字本で、外国の地名、人名が「なうすてる」Noster、「アウチ」Romaのように開音で書かれる傾向があることなどと併せ考える必要があるかもしれない。参考 浜田敦「国語音韻体系に於ける長音の位置 特に才段長音の問題」『国語学』22 なお、拙著『文献方言史研究』第三章第1節注10

注9 『時代別国語辞典室町時代編』による

（さ）の ふみのり・本学教授